

思考の野性

——いま存在するのは別の大学のために——

宇野 邦一

1 思考をめぐる

「わたしは考える、ゆえに……」17世紀のヨーロッパでひとりの男が発したこの言葉をめぐって、人はさまざまなことを考えてきた。かつてこのような言葉がしるされ、それが一時代を画する世界認識の原理となりえた。思考する人間は、後に物理学、数学、心理学、生物学、哲学などとして分化するあらゆる問題と領野について、また神についてさえも考えなければならなかった時代だ。この男はしかも、あらゆる偏見から自由になるために、旅や遍歴をみずからに課したと言われている。「わたしは考える……」が認識の第一原理として表明されなければならなかった理由、この言葉が一つの強力な原理としての価値を獲得することになった歴史の状況や背景を、まず想像してみなくてはならない。わたしは考える、ゆえにわたしは存在する……まったく奇妙な文であって、哲学も哲学史も知らないものには、ほとんど無意味な言葉表に見える。

そして後には、この言表を斥け、あるいは皮肉り、あるいは転覆しようと

するさまざまな言表があらわれた（ニーチェ、ランボー、精神分析等々）。確かに〈考える〉という行為や作用はあっても、その主体が〈わたし〉でなければならぬ理由はない。わたしが考えるには、その前にわたしが何かによって考えるようにうながされなくてはならない。わたしの欲望によって、わたしの情動によって、無意識によって。「わたしが考える」ことは、欲望や情動や無意識に突き動かされているにすぎない。しかもわたしの欲望そのものが、他者の欲望の投影にすぎない（ラカン）。むしろわたしは何かによって考えられており、考えさせられているというべきなのだ……。それゆえ、わたしとは一人の他者にすぎない……。少なくとも、わたしが最初にあるのではない。わたしは考える、ゆえに……。この「ゆえに」がそもそも奇妙なのだ。「わたしが考える」ということは不可能だし、「ゆえに」という言葉で、「わたしが存在する」という結論を導くことも不可能なのである。

『方法序説』の哲学者は、あらゆることを疑った末に、それでもなお確実なのは「わたしは考えるから、わたしは

存在する」ということであると述べた。この詭弁にみえる命題が、重大な説得力をもった世界と時代があり、こんどはそれにさえも疑いをむける思考が積み重ねられてきた。いったい思考という言葉で人は何をさしているのだろうか。もちろん哲学者だけが思考するのではない。哲学者たちは、正しい理性の行使として思考を考えるが、漁師は魚をとるために思考し、産婆は出産について思考し、料理人は食材から調理法や盛りつけにいたる精細な思考を身につけている。書物で読んだことを教室で要約したり概説したりしているにすぎない哲学の教師が、他のいろんな職業の人間よりも、よく思考する人間であるなどとは誰も信じていない。書物にむかう時間が長ければ長いほど、人間は実人生についての思考能力をすり減らしてしまう。哲学者は、人間なら誰もがもちあわせているはずの理性を〈仮定〉して、その理性にとっての普遍的な真理をうちたてようと、それに適合する認識の体系をうちたてようとする。そのような〈仮定〉は、たしかに〈仮定〉にすぎないにせよ、とりわけ西欧の歴史のある時点で大きな効果と価値をもった。しかし〈普遍的理性〉が存在することは、今ではますます一つの〈仮定〉にすぎないと世界中で感じられているし、それは地球上の一つの地域の一つの歴史において価値をもったにすぎないと感じられている。一方で私たちは、この〈仮定〉と切り離せない形で生まれた科学技術や政治

制度や経済システムの成果を、必ずしもその前提を疑わずに受入れ、踏襲してもいるのである。私たちの世界で〈理性〉はもう哲学的に証明される必要はなく、決して厳密に定義される必要もないが、それでも私たちは、歴史的なコンテクストの中で発生してきた〈理性〉をある程度まで共有しながら、その〈理性〉と不可分であった科学や技術や法や経済の中で生きているのである。

こういう状況を生きている人間にとって一体〈思考〉とは何なのだろう。そして思考とは何だろうと問うことの意味は何なのだろう。17世紀に、まだ教会や神学の権威に脅かされながら、ほんとうは決して万人のものでも普遍的なものでもありえないのに、それでも可能性としては万人にとって普遍的であるような真理をもとめた「私は考える、ゆえに」というような思考を、いま別の形式、別の論理によってもう一度復活させようともいうのだろうか。どんなに世間知らずの哲学者でも、たった一つしかない絶対的な真理の体系を構築することなど、もう不可能なことはわかっているはずだ。官僚は行政について考え、医師は病気について考え、刑事は犯罪について考える。彼らにかわって哲学者が思考できることなど、ほとんどないし、たいていの哲学者は哲学書を読み、その特殊な言語を理解し、あやつることができる人間にすぎないのだ。

哲学の方では今も、人間とは何かに

ついて、生きるとは何かについて、存在とは何かについて、誰よりも根本的に普遍的に考えるのだと開き直るかもしれないが、デカルトはスピノザに批判され、カントはヘーゲルに批判され、ヨーロッパの哲学的伝統そのものがニーチェによって批判され、あるいは哲学的な認識そのものが、マルクスやフロイトによって哲学の外から批判され、またそのような思想史がさらに、思想では対処できない複雑な現実を脅かされている。思想史を少しでも追ってみるならば、根本性や普遍性ということについて何か基準をたて確信をもつことがきわめて難しいことに気づく。二つ以上の哲学的主張や体系を讀んでみるとその間を通約し、交通させることが、きわめて難しいことにも気づくはずだ。西欧において確立したさまざまな価値や制度や認識や技術なしにはなりたたない私たちの社会は、それと同時に平行的に進んできた「普遍性」や「理性」についての思考を、とてもあいまいな形で受けとっている。そのような思考は必ずしも必要でないし、文化や価値観の多極化という事態を生きている私たちは、むしろ「哲学」をだんだん一つの過ぎ去った特殊な文化として受け取ることに慣れている。だから思考そのものが、それ自体として何か、というふうな問いは問われる余地がない。思考は、いつもさまざまな状況で、さまざまな目的に対して、具体的にあるいは専門的に実践されるだけでいい。評論家やジャーナリストや作

家や学者や教祖が、少しだけ専門を越える知識や考察を提供するだけで、特殊領域に分断された思考の不足は何とかおこなうことができる。こういう思考のエコノミーの中にほとんどの頭脳が組み込まれているし、大学に属する哲学者たちもほとんど例外なくこの中に組み込まれている。思考とは、一つの手続きや方式や習慣にしたがって、推測し、判断し、選択し、実践にそなえることである。もちろん成功も失敗もある。あまり失敗が多いと、それは賭博のような行為にかぎりなく近くなり、無思考とみなされ、無謀だといわれることになる。

もし哲学が〈思考すること〉自体を教えるような〈学〉や〈知〉であって、この社会のさまざまな領域で、日常において、また仕事や専門において、たえず旺盛に行われているあらゆる思考とは、まったくちがう思考を教えるのだらうか。哲学という学問の大半は確かに哲学史として、かつて書かれたさまざまな哲学書を講読し、解説するような作業からなっている。それがもう少し野心的になるときは、そこから進んで世界や宇宙や人生や社会や生命についての新しい理解を与え、世界観や生き方についての新たな指針を与えるかもしれない。しかし私たちは、それが前提とする普遍性や理性や真理の観念が、一度くつがえされ、破壊されてしまった世界に生きている。まだそれを信ずることは不可能ではないが、あ

まりにも不条理で非道な戦争や対立や虐殺を通過してきた20世紀末に生きる人間の平均的な実感にとって、それはもう取り返しのつかないことにみえる。私たちはたくさんの知識や情報を必要とするが、決して思考など必要としていないのだ。

具体的な目的にも技術にも製法にも無関係の思考がありうる。特殊領域や専門的な知識を逸脱し、さまざまな次元を横断する思考が存在することも否定できない。しかしそのような思考があるとしても、それは、普遍性や普遍的な理性や真理を根拠とすることができないのだ。思考は、対象についてだけでなく、思考自体についても思考する。思考はどこまでもいく。思考の可能性は無限である。けれども、それは普遍も全体も真理も手にいれることができない。思考はそれ自体無限であるが、何一つ確かなものを手に入れることができない。いつも確かなものを手にいれようとして思考しているのに。これが私たちの〈思考〉をとりかこむ根本的な状況ではないだろうか。20世紀の哲学を画することになった多くの書物からも、このような状況が読みとれる。真理や本質や普遍性を批判することによって、確かに哲学は自己否定を深めることにもなった。

思考は、あらかじめ無限の可能性もっているわけではない。それどころか、思考は思考をはばむものに包囲され、がんじがらめになっている。思考は、あくまでも既に思考されたものに

したがって思考するしかなく（一定の規則にしたがって既知の観念を操作する場合）、あるいは思考をうながすものに従属するようにして（情念や意思や欲望にしたがって）思考するしかない。思考するためにわれわれは言語を必要とするが、その言語自体が、すでに私以外の誰かによって与えられたものだ。そのようなあらゆる限定や強制を退け、そのようなものから逃れ、そのようなものに従うまいとする思考がありうるのだろうか。何かに従属する以前の思考であり、何ものにも従属しまいとする自立的な思考と言ったものはありえないだろうか。

2 思考のイマージュについて

「残念なことに文学では、考えている人間ほど描写しにくいものはない。」ローベルト・ムージル『特性のない男』（加藤二郎訳）は、思考すること自体を哲学の外部で問う、たぐいまれな小説の一つだが、「思考の仕事に格別意見をもたない人なら、読み飛ばしてよい章」と題された一章ではまさに、思考するとはどんなことであり、どんなふうにして可能かを問うている。「精神的問題の解決の道程は、ステッキをくわえた犬が狭いドアを通り抜けるようにするのはほとんどなんら変わらない。そのとき犬はステッキがするりと通り抜けるまで、頭を右に左に振り回す。われわれ人間のやり方も、それとまったく同様で、ただ違うのはむやみやたらに試みるのではなく、すで

に経験でどうすればよいかをおおむね知っているということだ。もちろん頭を左右に振り回すとき、優秀な頭脳なら愚鈍な頭脳にくらべてはるかに多くの熟練と経験をもっているとはいえ、するりと通り抜けるのはやはり不意のことなのだ。それは突然やってくる。」

(1) それゆえに、精神的問題を解決しようとして思考する人間が、厳密にどんな思考をしているか考えてみると、ほとんどこの人間が思考しているかどうかさえ疑われるのだ。思考はいつも「ひとりでに生まれる」。それは「突然やってくる」。問いが解決される場合、思考は突然やってきて既に完了しているし、解決されない場合は、思考は始まっておらず、進行してもいない。いずれにせよ、私たちが「思考」とよぶものは「頭脳の中でめぐりあう物たちの間の親和性と相関性にと過ぎない」とムージルは言う。「だから考えるということは、それが完成していない限りは本来まったく惨めな状態で、それは大脳のしわ全体の疝痛ににている。だが、いったん完成されてみると、それはもはや思考する形態——その形態で、考えるということが体験されるのである——をもたず、思考されたものの形態をとってしまう。そしてそれは残念なことに非個人的な形態なのだ。というのも、思考はそのときは外部に向けられていて、外界への伝達の用意を整えているからだ。」思考するという事態は、実は思考以前のさまざまな想念のあいまいな結合と、すでに思考

され、完結してしまった非個人的な形態のどちらかとしてあらわれるしかない。ムージルはこう書きながら、思考という現実、私たちが考えているよりはるかに不確かな一つの可能性にすぎないことを指摘すると同時に、思考の個人性についても徹底的な批判をむけている。私たちはいつも思考以前か思考以後にいて、ステッキをくわえた犬が狭いドアを通り抜けるようにしているにすぎない。そして何とか思考して問題を解決するときは、まったく非個人的なシステム（思考機械）が作動して、思考はいつのまにか完了しているのだ。「特性がない」という事態について徹底的に考え抜き、そのような事態の果てに一つの奇妙な愛の形を模索するこの長大な実験小説は、こんなふうにして思考という現実をめぐって私たちが設けている幻想（思考可能性、理性、個性、主体性）を粉砕することから始まっている。思考というプロセスの等質性や確実性は、思考の外から思考に強いられるだけだ。思考を統御し決定する主体性（私は考える）も一つの幻影にすぎないことになる。強力であったり、独創的であったりする思考の自意識も、思考の自立性がありえないなら、やはり仮象にすぎない。同時代に対する多くのアイロニーをこめたムージルの、思考に対する破壊的な批判は、実はそれ自体が思考の自立性を新たに模索する試みになっている。彼にとって思考の自立性は、コギトも哲学とも、あるいは日常生活や専門

領域における思考とも一線を画したところに、新たに生みだすしかないような何かである。

哲学の思考が、あらゆる前提や予断や偏見をとりはらって、みずからを純粹な理性の行為として示すときも、どうしてもそこには歴史や道徳や政治などさまざまな次元から強いられる思考のモデルが含まれている。思考は、そのようなモデルによって、まったく未知の事項ではなく、あらかじめ知られている事項を認知する行為に等しい。思考はあらかじめ数々のイメージでみちていて、そのイメージを再認するような過程である。哲学が偏見や迷信から自由であろうとし、純粹な客観性として概念を作り上げようとしても、概念は歴史的なさまざまな力関係の場からくる、さまざまなイメージと再認の要請をおびている。ニーチェのような哲学の破壊者は、哲学の思考が隠蔽し、あるいは擬装するさまざまな意志や権力に眼をむけながら、まさに思考に強いられる仮面をはぎとるようにして思考する。思考に強いられるあらゆる強制について思考するような思考は、それ自身が真であり、効果をもつことを、もう素朴に信ずることはできないだろう。多くの策略や技法や、また別の仮面さえも必要になるだろう。

ニーチェ的な批判の姿勢を、たぶん、その策略、その危険、その射程の大きさを含めてもっとも直截に引き受けたのは、ジル・ドゥルーズの一連の試み

かもしれない。『差異と反復』第三章「思考のイメージ」は、哲学的思考がいかに多くのイメージを含み、それを再生産し、補強しているかについて述べている。「このような意味で、哲学の概念的思考は、常識という純粹な要素から借用された、哲学以前の、自然な思考の〈イメージ〉を暗黙の前提にしている。このイメージによれば、思考は真なるものに相似しており、形相的に真なるものを所有しており、質料的に真なるものを欲するのである。」「思考のこのようなイメージをわれわれは、ドグマティックな、あるいは正統的なイメージ、道徳的イメージとよぶことができる。」プラトン、デカルト、カントの哲学がいずれも画期的な概念を形成しながら、それぞれ思考のイメージを内包させ、また新たにこれを強化していることを批判しつつ、ドゥルーズは「イメージなき思考」(pensée sans image)の相貌を徐々に浮かび上がらせていく。均衡や調和や確実さにむけて思考を純化することよりも、むしろ思考をうながし、また場合によっては思考を不可能にするような、思考の外にあるもの(力、暴力)について思考すること。「概念には一つの爪、絶対的必然性の爪が欠けている。つまり思考を襲う一つの起源的暴力、一つの奇妙さ、一つの敵意の爪が欠けている。それだけが、思考をその自然的な停滞や永遠の可能性から引き出すのだ。それほどにも思考は無意志的で、思考において強いら

れて発生し、不法侵入によって偶然この世界に生まれるからこそ絶対に必然的なのだ。」(2) ドゥルーズはブルーストについて、こんなふうにも書いている。「われわれに暴力を与えるものは、われわれの善良な意志や注意深い仕事の成果よりも豊かである。そして思考よりも重要なものは、思考させるものである。」(3) こんなふうには思考のイメージを批判し、思考をうながす暴力の爪について思考し、「イメージなき思考」について考えようとする姿勢は、ほとんど哲学という学問そのものを拒否する試みのようにみえる。ドゥルーズは場合によっては、あからさまに芸術とその記号の創造を、哲学よりも優位においている。けれども最晩年にも『哲学とは何か』という書物を書いたドゥルーズは決して哲学を放棄しなかった。「イメージなき思考」でさえも、それがやはり思考であるかぎり、もう一つの「哲学」を要請する。思考をうながすあらゆる出会い（それは再認や再会ではない）、思考を強いる暴力や情動や意志や無意識や身体、あらゆる偶然や混沌や、力のたわむれについて思考せよという提言は、ほとんどロマンティックな無政府主義に似てみえる。哲学にしるのびこんだ権威や伝統や道徳に対する強い反感は、あらゆる教育的配慮や調停や媒介のための思想を斥けるナイーブな自然主義に似てみえる。そしてドゥルーズは自分の「ナイーブさ」を決して否定したことはないのである。

いったい「イメージなき思考」などというものは果して可能なのか。思想の伝統を批判するこのラジカリズムは、一つの過ぎ去った政治的季節に呼応した実験の呼びかけにすぎないのではないか。思考は言語とともにおこなわれる以上、意味や表象やあらゆるイメージと、それを発する個人や主体と切り離せないではないか。いろいろな疑問が投げかけられよう。ムージルやドゥルーズのように、思考自体をめぐるさまざまな前提や幻影を斥けることによって、いったい人はどんな思考にいたろうとするのか。その道筋がよく見えないとき、私たちはただそれを政治的なラジカリズムに翻訳するしかない。哲学に属しようと属しまいと、およそあらゆる思考に含まれた強制を批判しようとするとき、このような思考自体は、そんなふうには思考の前提を見つめながら、思考を停止するのではなく、思考の徹底的な自由を求めている。もちろん思考の不自由を見通したからといって、それがそのまま思考の自由につながるわけではない。思考の他律性を批判することによって、たちどころに自律性（あるいは自立性）が獲得されるわけでもない。それでも哲学において思考に強制されるものを思考し、〈思考の野性〉とでもいうべきものを再発見しようとするこのような試みは、もちろん政治的な意味をおび、哲学をはるかに越えた地平で、生命と自由を発見する試みにつながっている。そのような脈絡が、どんなふうにも実現

されているか、それを読みとること、その脈絡をわれわれの生きている現実のなかで理解すること、それが難しいのだ。

ドゥルーズは『差異と反復』で、思考に強いられる再認 (reconnaissance, récongnition) のメカニズムを精細に批判している。re あるいは ré として〈再び〉が意味されるとき、そこにはどんな性質の〈反復〉が導かれているか見ようとするのである。〈再び〉という語形成要素は、すでに同じことの〈反復〉を示しているが、同一なものがめぐってくるという認識そのものが、ドゥルーズにとっては、すでに〈差異〉を隠蔽し抑圧することにはほかならない。同一なものが何一つ成立しないような世界とは、ほとんど狂気や混沌の次元にすぎないが、ドゥルーズの思考の一つの原理が〈差異の絶対的肯定〉であるかぎり、この思考はいつも極限に狂気や混沌をかかえているといわざるをえない。それはどうしても、われわれの思考の因習や伝統や權威にとっては大きな挑発なのだ。この挑発に何の意味も、価値も見いだせないなら、ニーチェもムージルもドゥルーズも読むには及ばない。〈再び〉〈re, ré〉という接頭語についての批判的考察は、表象あるいは代理を意味するルプレザンタシオン *représentation*、あるいは恨み、遺恨を意味するルサンティマン *ressentiment* に対する批判に結びつく。それはまた、現実にかわる現実の〈表象〉に対する批判となり、

万人に代わって (代理として) 物事を考えたり、意見を述べたり、教えたりする知識人に対する批判にもなっている。また知識や道徳や哲学に内在しているルサンティマンの批判にも及んでいくのである。

「世界には思考するように強いる何かがある。この何かは根本的な出会いの対象であり、再認の対象ではない。」
(4) 思考を強いるもの自体が一つの果てしない宇宙を形作っている。ドゥルーズはときにその表出を〈暴力〉という言葉であらわすが、その暴力は人間の外の暴力でもあれば、人間に属する暴力でもありうる。たぶん哲学の努力はたいていの場合、人間の内部について思考し、人間的なものの境界を決定し、〈再認〉の可能性を確固としたものにする事だった。別に政治家や官僚に起用されることがなくても、哲学者は、しばしば国家を、理念的に補強するように思索をおこなった。近代の国家は人の内面に成立するようになり、国家を、必ずしもそれと意識されないような形で、個人の内面によって支えるようなシステムを生み出すという要請の中で、近代の哲学も洗練されていた。それでも思考を、そのようなシステムから遠くに脱出させ、思考を別の物質や別の空気に〈出会わせる〉異様な思考が、ときどきあらわれた。常識や理性にとって、このようなものが思考とよびうるかさえ確かではない。ムージルとドゥルーズを合体させた一つの奇妙な思考機械があるとすれば、

それはこんなふうにつぶやくのだろう。人が思考しているかどうか決して自明ではない。哲学者でさえも、一つのシステムにしたがって、そのシステムを確かめるように思考しているにすぎない。しかしこのシステムにしたがうかぎり、人はいつも思考に達しえない思考不可能の状態か、あるいは既に思考を完了してしまった状態にあって、決して思考しているとはいえない。思考を始めるには、このシステムの外に出て、外にあるものと出会わなくてはならないが、そこで人はもちろん別の思考不可能なもの、思考されないものに出会う。そこには、何一つ同じものも、再現するものもない。はてしない差異と混沌のなかで、もう言語もろくに機能しない。けれど、これは決して人間のいない砂漠や原始林やマグマの中のことではない。思考不可能なものは人間の中にあり、人間の内部を形成し、いつも思考をうながしている。哲学を批判する一見ナイーブで無謀な思考は、それゆえ別の抽象性と厳密性をもたなくてはならないし、もつしかない。それはいつも思考の自立性と自由を確かめようとする行為でもあるのだが、それは思考の外にあるものとの、幸福や喜びでもあれば、災いや恐怖でもありうる出会いを確かめる行為でもある。いずれにしても予定された調和や至福はない。差異しかない世界は暴力的で残酷である。しかし、それは同一性による強制や閉塞の暴力よりもはるかにましなもの、優しいものである……。

3 知識人ではなく……

「イマージュなき思考」を探究するのは、一体この世界の現実はどうたちむかうのだろうか。たとえば、この思考に特有の政治学といったものがあるだろうか。注意深く読めば、ドゥルーズは彼の著作のいたるところで、この問いに答えている。たとえばあるインタビュー（1985年）でドゥルーズはこう語っている。「哲学においては、人は永遠の価値に、また永遠の価値の守護者としての知識人という観念にもどっています。たとえばバンダは、すでにベルクソンを批判していました。ベルクソンは運動について思索しながら、自己の階級、つまり聖職者の階級を裏切ったというのです。今日、永遠の価値の役割を果たしているのは人権です。権利といったものの現状、それにこれに類する他の概念も、まったく抽象的なものであることはみんな知っていることです。しかしこうしたものの名において思考は停止され、運動という用語で何かを分析することはすべて阻止されています。しかし抑圧が恐るべきものであるとしたら、それが運動をさまたげるからであって、永遠なものを攻撃するからではありません。」(5) ここではベルクソン哲学の中心の主題である「運動」が問われているばかりでなく、一般に思考そのものの運動が、あるいは生きること自体に等しい運動が問題になっている。「人権」さえも、それが抽象的な枠組みで主張されるだ

けで運動としての生を阻害するならば、抑圧にかわりうる。ドゥルーズがあれば、思考をイメージから解き放つための批判的思索を重ねたのは、イメージとそれにともなう再認や表象の機能が、運動としての思考を妨げるからだ。

たとえばエドワード・W・サイードは『知識人とはなにか』で、「結局のところ、重要なのは、代表的人物としての知識人のありかたである——つまり、知識人たるもの、なんらかの立場をはっきりと代表—表象する人間、また、あらゆる障害をもとせせず、聴衆に大して明確な言語表象をかたちづくる人間たるべきなのだ。わたしの論旨とは、知識人が、表象—代弁する技能を使命としておびた個人であるということにつける。」(6) パレスチナの闘争を擁護する文章を書いたこともあるドゥルーズは、パレスチナ思想家サイードと、世界中のマイノリティを擁護し、御用知識人や思想的俗物を批判することにおいて何ら意見をことにするはずはない。にもかかわらず、「イメージなき思考」はこのような知識人の概念と、まして表象—代表という用語のこのような不用意な使い方と、あいられないにちがいない。『ニーチェと哲学』においてドゥルーズは、意識が根底的に反動的 réactif であることを指摘しながら、やはり接頭語 ré に注目している。意識はすでに一つの行動に対する反作用として、行動に対する反動としての性質をおびている。

そもそも意識は、行動に対する反作用として生まれるものである。意識のそのような反動的性質は、道徳や宗教やあるいは政治制度さえも、生命や運動に対する抑圧として作りだしてしまうと、ドゥルーズはニーチェを読み解きつつ言うのだ。力や暴力は、人間にとってももちろん危険なもの、恐るべきものだが、その力や暴力を、人間がいつも「表象—代理し」représenter し、反動として形成された意識によって変形してしまうことが、力や暴力をもっと悪い「権力」に変形してしまうという。こんなふうにもいつも re (再び) の悪しき効果を指摘するドゥルーズにとって、他人や集団を表象—代表する知識人という概念が好ましいものであるはずがない。思想の課題は、むしろ「表象」という作用を徹底的に斥け、できるかぎり同一性の強制を越えて、差異そのものにしたがうことである。そのような思考こそが、マイノリティの差異と運動を解放する試みに重なっていくにちがいない(マイノリティは決して少数民族に限らず、男に対する女、大人に対する子供、理性に対する身体、白人に対する非白人など、あらゆる次元や領野において存在する)。思想や哲学を学び、書物を書き教授するような人間の課題とは、思考があらかじめ含んでいるさまざまな強制(表象あるいはイメージ)を斥けながら、知識人も大学とも遠い人々や場所に実在するさまざまな運動に注目し、さまざまな運動の間を仲介し、接続する

ことだ。それさえも「表象—代表」という言葉でよぶなら、それは確かにもう用語の問題にすぎない。

いったいどんな強制もイメージも表象もふくまず、どんな主体性や同一性も斥ける思考や運動といったものが可能なのか。問いはいつもそこにもどる。どんな意味ももたない言葉、どんな物語も含まない小説、どんなイメージも含まない絵画があるのかと問うように。けれども私たちが、西洋と東洋、抑圧と被抑圧、戦争と平和、社会と個人のような大きな枠組みで考えているさまざまな問題は、思考と運動に内在するさまざまな強制という見えがたい次元にまでさかのぼらなければ、いつも悪循環に終わるしかない。おそらく「思考のイメージ」とは、単に哲学や哲学批判にかかわるだけでなく、われわれの生のあらゆる可能性と自由にかかわる問題なのだ。

思考の野性について書いた以上、レヴィ＝ストロースの重要な本『野性の思考』(*La pensée sauvage*)に少しふれておきたい。この本は西欧の歴史的理性(特にサルトルのいう弁証法的理性)の思い上がりと閉鎖性を批判し、トータリズムの社会にも固有の合理的な思考(野性の思考)があることを論証して、西欧の知的覇権に重要な異議申立てをしたのだった。そしてレヴ

ィ＝ストロースの問題提起と手法(構造主義)さえも、まだ西欧に固有のエスノサントリズムを内在させているとして、やがて批判されることになる。〈思考の野性〉は、決して人類学が発見した〈野性の思考〉に等しいものではない。むしろそれは、歴史的な思考が支配する場所には、歴史に回収されない思考を発見し、ほとんど無時間の構造が反復するとみなされる場所には、たとえ書かれることがなくても固有の歴史を形成する運動があり、あるいは歴史を拒否する生き生きした運動があることを発見するような思考であるに違いない。

註

- 1 『特性のない男』ムージル著作集 第一巻、加藤二郎訳、松籟社、p.135
- 2 Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, p.u.f., p.181.
- 3 Gilles Deleuze, *Proust et les signes*, p.u.f., p.41.
- 4 op.cit. *Différence et répétition*, p.182
- 5 Gilles Deleuze, *Pourparlers*, Minuit, p.166.
- 6 エドワード・W.サイド『知識人とは何か』, 平凡社, 大橋洋一訳, p.35

(大学教育研究部 教授)